

「里山」の緑をまちにつなぐ

住民と大学との協働によるポケットパークづくり

新潟大学工学部西村伸也研究室

西村伸也

棒田 恵 (自然科学研究科博士後期課程)

櫻井典子 (日本学術振興会特別研究員)

■まちづくりを始める

平成19年度より三条市と新潟大学大学院の学生が協働するポケットパークづくりを始めた。これまでの話し合い・まち歩き・計画案の提案・限定された期間の中だけの環境形成、というプロセスを繰り返すまちづくりではなく、住民と大学が協働して、住民自らの手で現実の環境としての緑ある小さな公園をつくっていく実践的なまちづくりである。

新潟県の県央に位置する三条市は、沢山の町工場が集まる金物・工具の町として知られ、ものづくりの得意な人たちが住んでいる町である。しかし、いろいろな状況の中でこれまで特徴的なまちづくりの活動が立ち上がってはいなかった。日本一若い市長の誕生を契機に、日常の環境を実際に地域住民との協働によって変更していくことを目指したまちづくりを提案した。幸い、新潟大学と表町の人たちとの雁木づくりをよく知っていた地域の人たちからも、この提案は快く受け入れられて、具体的に動き始めてみることになった。

三条市を東西に横断するJR弥彦線高架下には2m幅の道がつづき、定期的に市が開かれ周辺住民が朝夕に散歩をする格好の場所である。この路線を高架化する時に余った市の土地が、11カ所残されていた。それら点在する残地を、毎年度一カ所ずつ地域の人たちと大学院生が、ポケットパークとしてつくるという計画を立てた。

■里山の緑をまちに映す

まずポケットパークを建設するために拠り所となる全体のコンセプトを決めることから始めた。半年をかけて、点在する空き地が中心市街地をつなぐ「緑の回廊」という言葉を地域の人たちと学生とがつくりあげた。しかし、ポケットパークを緑化し回廊としてつなぐだけでは、魅力的なまちづくりの計画とはなり得ない。三条市は、平成17年5月1日に三つの市町村(三条市・栄町・下田村)が合併して大きな新三条市となっていた。その三条市の外縁には木々の繁茂する里山が沢山あり、地域の人た

ちの憩いの場所となっていた。そこで、点在する里山の木々の成長、春の芽吹き、夏の深緑、秋の紅葉という変化を市街地で実感すること、里山とまちをつなぐことを考えた。ひとつの里山の緑だけでつくるポケットパークは、里山の緑の変化を映す「環境の鏡」となり、三条の市街地にあるポケットパークから里山を通し見ることができるという計画である。

■ポケットパークをつくる

このまちづくりは、新潟大学自然科学研究科で前期に開講される「建築計画学特論」(2単位)を活用して以下のように一年を過ごしている。

●まちと里山を歩く (5月~6月)

大学院生と住民がチームを組んで、活動が始まる。各チームは、周辺の地域を歩いて、まちの歴史や特徴などについて地域の人たちと話をしながら、計画にかかわる鍵を探していく。園芸組合、樹木医などの専門家とともに里山を歩き、樹木や植物の名前、特徴を学ぶ。

●デザインする (6月~8月)

各チームが敷地を実測調査してデザインを検討する。7月には、デザイン案を地域の人たちに発表して、植物の種類と樹形、水やりや除草などの管理の方法、空間の親しみやすさ、隣地や周辺との関係、ユニバーサルデザイン、安全性、排水等、幅広い検討が行われる。再度のデザイン案の発表を受けて、沿線の地域住民による投票と実行委員会による検討が重ねられて計画案を決定する。

●ポケットパークをつくる (9月~3月)

計画案に、植栽、排水位置、電気配線、土留め、材料などの詳細な検討を加えて、実施図面をつくりあげる。9月からは里山を繰り返し歩き、実際に移植する樹木・植物を選定する。地域の人たちと学生のチームに建設業協会・園芸組合の青年部と専門家がボランティアで加わって、施工と植栽作業を行い、年度末の竣工を目指す。

■地域の人と子どもたちが参加する

この活動は、極めてわずかな予算でつくっ



写真1 | 計画提案



写真2 | 樹木の掘り出し



写真3 | 子どもたちの石の埋め込み



写真4 | ポケットパークで遊ぶ子どもたち

連載第5回。本ページでは、まちなんらかの「モノ」を仕掛けることで、そこに活気や魅力を与える活動を行っている研究室やグループに、その取り組みを紹介していただきます。今回は、新潟大学の西村伸也研究室が継続して行っている、「里山」の緑を用いたポケットパークづくりです。

ている。材料代と機材の使用料のみが経費で、すべての人たちがボランティアで関わり、足りないものは地域からの寄付で賄っている。その中で、里山の緑の移植、さまざまな地域の人たちと専門家の参加、地場の材料と技術の活用、石の設置という仕掛けが出来つつある。

JR弥彦線沿線地域の11自治会の住民を中心に、3小学校のPTA、市民団体（花と笑顔を育てる会、三条デザイン研究会）、一般市民、地域の専門家（樹木医、三条市建設業協会、保内園芸組合、三条市左官同業組合、三条加茂電気工事協同組合、三条管工事業協同組合、三条木創り舎、三条市建設関連協議会、石材店など）から多数の人たちが参加している。新潟大学大学院の大学院生、三条市役所を加えると、約120名の人たちがこのポケットパークづくりに力を注ぐ。

このポケットパークで遊ぶ子どもたちとのつながりも大切である。子どもたちが近くの五十嵐川で拾ってきた石に自分の名前を書き入れて床面に埋め込んだり、里山で採集した葉をかたどったコンクリートタイルを床面に敷いたりしている。ベンチ座面の和釘の打ち込みも子どもたちが行き、ポケットパークづくりに子どもたちの記憶を活動として留めようとしている。また、五十嵐川で丸い大きな石を見つけて、水が噴き出す石とビー玉がらせん状に転がっていく石をデザインした。そんな石もポケットパークで見つけることができる。

参加する専門家もつ地場の技術と地場の材料を使うことも大切である。伊勢神宮に使われ続けている三条の和釘をベンチの留め具として使用し、五十嵐川の石を材料の一部に使っている。

■大崎山と保内の緑を移す

これまでの2年間の活動の結果、二つのポケットパークに里山の緑が育ち始めている。

1) 大崎山のポケットパーク

三条市民に最も親しまれている里山、大崎山の緑を移植したポケットパークである。東西に延びる93m²の敷地に合併した3市町村を象徴する山と樹木を3つ重ねた。緩やかに曲が

るベンチには和釘を使い、床面には子どもたちが埋めた小さな石が波紋のように広がっている。中心となる三本の樹木（西側からチョウジザクラ、コナラ、ヤマモミジ）を結んだ先は大崎山を向かい、ポケットパークと大崎山の関係をかたちにしている。

2) 保内のポケットパーク

紅葉がきれいな保内の里山から緑を移植し、約51m²の敷地にシンボルとなる3本のカエデ（ヤマモミジ、コハウチワカエデ、ヤマモミジ）を三角形に配置した。葉の形、大きさ、色、紅葉の時期が少しずつ異なるカエデの姿を見上げる土留めのベンチが置かれている。

■ポケットパークと長くつきあう

このポケットパークづくりは、植物を育てるという長い時間の始まりでもある。3年目に入り、住民の中で水やりや草取りなどの維持管理についての議論が行われている。建設するだけではない関わりが、大学と住民にとってそれぞれ大切となる。

まちづくりでは、毎年さまざまな問題が発生するが、その都度、住民と専門家とともに丁寧に議論し乗り越えてこの活動をすすめている。植物の成長を日々楽しみにポケットパークを訪れる住民、ポケットパークづくりを通して木や草について勉強するようになった親子などを仲間にしなが、このポケットパークとのつきあいを楽しんでいる。

編集・メンバー

西村伸也・棒田恵・櫻井典子

プロジェクト

〈平成19年度〉

●大崎山のポケットパーク

西村研究室：西村伸也、棒田恵、櫻井典子、石向良成、工藤裕、野澤明美、樋口雅希、渡邊恵、王富青、上村千代美、高橋俊行

〈平成20年度〉

●保内のポケットパーク

西村伸也、大月拓也、小出真吾、野澤明美、櫻井典子、棒田恵



写真5 | 大崎山のポケットパーク



写真6 | さまざまな地域の人たちと専門家